

人つなぐ「家の祭り」

能登では家の中でも祭りがある。ほかの集落の親戚や友人、職場の関係者を自宅でもてなす「よばれ」の風習だ。

能登では、7月上旬から8月中旬まで、週末を中心に、ご近所の集落

キリコと 生きる 日本遺産

▶9◀

で祭りがあり、顔の広い人はあちこちに呼ばれて酒を飲む。自宅でも食事を交わしながら、このシーンを「キリコ」と呼ぶことも少なくない。

「いっしょ」並ぶ

20日、珠洲市飯田の燈籠祭り。焼酎メーカー「日本醸造化成」を営む野々江町の藤野貞治社長(69)方には、午後7時ごろから、入れ代わり立ち代わり客が来、妻の愛子さん(59)が膳の上げ下げに忙しい。この日は80人もの来客があった。

「人がいっしょに来て騒ぐのが家は、神様もいっしょに楽しむ場所だ」とも。隣の男性は「まだ理由を付けて杯を空けている。目の前には「いっしょ」の数々だが、会話が弾んで、箸を付けるの

が後になる。そうしている間に「で」は一曲」と民謡大会が開幕。自宅を舞台にした盛大な「飲みニケーション」が繰り広げられていく。

なぜ能登でよばれは盛んなのか。民俗研究家の西山郷史さん(68)は「珠洲市飯田町」は土地の豊かさを挙げ、山からマツタケが転がり、海

よばれ



「よばれ」の宴で膳を囲み、交流を深める客人たち—20日、珠洲市野々江町

能登の豊かさを象徴

ではアリの跳ねるのが能登。もてなすだけのものが、とれていったということでしょう。

加えて、能登には濃密な人間関係が存在する。人々は助け合い、田植えなど大規模な農作業では「結」という共同体で乗り切る仕組みがあった。西山さんは「少し集落でも鍛冶がいて大工がいて、生活すべてを完結できる」と能登の特徴を言う。そうした濃密な人々のつながりがあってよばれは培われた。

女性を支え

それにしても、家の女性たちの苦労は大変なものである。ひと昔前までは、輪島塗の椀、膳に手作りの料理を並べ、果物や菓子などの土産「ぶた」も用意した。仕出し料理が主流となった今でも、赤飯やひねずし、昆布巻きなど家庭の一品が準備され、部屋のしらすも含めて女性は多忙を極める。祭りを楽しむ余裕はない。

外で花火の音が響く中、藤野家では愛子さんが卓と座敷を忙しう行き来していた。嫁いだから一度も花火を見たいとがないという。それでも、よばれを嫌だと思ったりとはない。「年に一度の感謝の気持ちを送る日。大変ですけど、終われば今年の祭りは良かったとなるんです」。

キリコを担ぐ男がいて、太鼓をたたき子どもがいて、よばれを支える女がいて。能登の祭りは家族総出のパフォーマンスだ。その渦に巻き込まれるから、人はごんごんに酔ってしまうのだ。

(森田奈々)